

優柔不断を越えて、虹の彼方へ

—『斜陽』における超越志向に関して—

ストラック・ダニエル

はじめに

戦後日本社会は様々な問題に直面していたが、その一つは日本の目指すべき政治体制である。戦時中、日本の将来に関する公的な討論は許されていなかったが、戦後は、日本の思想家が自国のあり方に関して明治維新以来再び検討するようになった。いうまでもないが、近代文学の作家たちも、この問題に取り組みつつ、作品を執筆した。民主主義を肯定する場合に限って、主張の自由は制限されていなかっただろうが、GHQの検閲の影響で共産主義など非民主主義的な見解は真正面から持ち出すことは困難であったと言えよう。その上、未だに従来の制度に固執する読者は少なくなかっただろう。小説家はGHQの検閲を受ける前提で、未来への希望を読者に与えなければならなかった。この厳しい執筆状況の中で、戦後の多数の作家たちは慎重に政治的な立場を提案した。本論は『斜陽』における複数のイメージの集合体を解釈することを通して、作中に潜在している太宰治の複雑な戦後政治観を考察したい。

一、『斜陽』における貴族と平民の対立

『斜陽』において、多数の研究者は直治が貴族出身であることに苦悩していることに着目している。例えば、中村三春は、この点に関して、「なぜ、このテキストは貴族なるコミュニティを設定しなければならなかったのか」と問いかけている。（中村 九六）この問題に取り組む郡継夫は、貴族と平民の対立関係はプロット全体における主要テーマであると結論づけている。郡の見解によると、庶民に同化したい直治の希望は挫折するが、「かず子は、上原の子をみごもることによって、ある意味では転生の願い

を果たす。」（郡 一九二——一九三）

郡がこの見解の第一の裏づけとして挙げているのは、直治の「庶民」に対する憧憬である。とりわけ直治の場合、この特徴は作中で首尾一貫しているために、直治の描写傾向に限っては疑問の余地がないだろう。そしてさらに、郡は、かず子の存在も、同じく「庶民への転生」という方向性の中に規定しているが、その証拠として「蛇の話」の特殊性を取り上げている。

かず子が「蛇の卵」を燃やそうとする事件が作中に描写されているが、この箇所において、「蛇」は如何なる存在だろうか。郡によると、蛇は「異人」であり、異人は「庶民」のことを指している。（郡 一八七——一八七）物語全体を「庶民への転生」を表現するものとして解釈すれば、貴族にとって庶民は異人である上、「蛇」を「庶民」として解釈することには無理がない。しかし、「蛇の話」の細部まで考慮すれば、この解釈には疑問の余地が生じてくる。

「蛇の話」の描写において「蛇」と「蝮」は区別されている。かず子が最初に見つけた卵を燃やそうとする理由は、「蝮の卵」（一三）と誤解していたためであったが、実際は蝮の卵ではなく、普通の蛇の卵であることに後に気づく。その真実を把握するかず子は小石を墓標として設け、その卵の墓を「拝む」ことになる。「蝮」は危険な毒蛇であるが、普通の蛇は燃やすほど危険なものではないとして描写されている。しかし、この蝮と普通の蛇の相違点を郡の「庶民への転生説」と照合すると、「蛇」を異人を代表するものとして解釈することが困難になる。貴族にとって、「毒をもった」庶民とは如何なる庶民だろうか。直治の見解によると、「毒をもった庶民」は決して存在しない。彼はあらゆる庶民及び「庶民」その概念自体に無条件に魅了されていると言える。「庶民への転生」が作品全体の主要なテーマであれば、「蛇」と「蝮」の相違によって庶民を二分することは望ましくない技巧であると思われる。

蝮の描写に見出せる問題は取りあえず保留にしたいが、「庶民への転生説」に関してもう一つの疑問が残る。直治の存在は「庶民への転生説」を

通して完全に理解できるかもしれないが、かず子にも、同様に「庶民に転生したい」意欲があるのだろうか。

かず子は、戦後の貴族の崩壊に関して悩んでいるというよりも、その社会的な変化を冷静に自分とはほとんど無関係のものとして受け止めていると言える。しかも、テーブル・マナーを基準にするかず子にとって、お母さまは「ほんものの貴族」（六）であることを主張しているが、自分のテーブル・マナーは母のものとは異なるために、自分の存在は「貴族」ではないという自覚をもっていると言える。母がスープを飲むエピソードが作品冒頭に登場するために、作品全体におけるかず子のアイデンティティは「貴族」からある程度かけ離れたものとして読者は捉えてしまう。同じ貴族の家に生まれながら、直治が徹底的に「貴族」として描かれているのに対して、かず子には純粹に貴族的な性質が見られない。太宰はなぜ同じ階級に属する二人の性格をこれほど対照的に描写したのだろうか。

さらに反論すれば、作中における「死」の意義に関する差異を指摘できる。『斜陽』における「死」は貴族に対する「罰」として解釈することができるだろう。結核で亡くなる「お母さま」の死は、後悔しない貴族に対する「天罰」として理解できる。又、生まれた社会階級に関して悩み続けた直治の自殺も貴族の後継者に相応しい「自滅」として捉えられる。しかし、貴族生まれのかず子は生き残る。かず子が「死」の罰を逃れることを許されているのはなぜだろうか。「死」を選ぶ直治、そして「生」を選択するかず子であるが、この貴族出身の二人共に庶民に転生したいという願望を持っていたとすれば、なぜ二人の運命はこのように異なっただろうか。

筆者の考えでは、『斜陽』の思想上の展開には、二通りの平行する軌道がある。直治の描写の傾向に注目すれば、「庶民への転生」という彼の意向が確認できるが、かず子の描写は、より抽象的な思想上の展開を具現化していると考えられる。かず子の思想の方向性を単純化して表現すれば、「共産主義への転向」とであると言える。

少年の太宰は、「物のはずみで」一時的に当時非合法の共産主義運動に加わった。（相馬 一八一—一九）「マルクシズムを積極的に肯定した」太

宰はその体験を通して苦勞し、やがて「衰弱した健康を回復するために」沼津に移動し、療養をした。つまり、作家の太宰にとっては、共產主義運動への参加が彼の思想に決定的な影響を与えたが、結局、太宰は共產主義ではなく、放蕩主義の方向性を選んだと言える。しかし放蕩主義者の太宰は、元来の政治的思想を捨てたというよりも、本格的に取り上げる契機を後々まで待っていたと言えよう。

昭和一六年刊行の「東京八景」において、太宰は裕福層に関して、以下の発言を行っている。

金持の子供は金持の子供らしく大地獄に落ちなければならぬという信仰を持ってゐた。逃げるのは卑屈だ。立派に、悪業の子として死にたいと努めた。（「東京八景」二九一）

戦前、太宰は彼の地位に関して、直治と同様に悩んだことは明らかだろう。

相馬によると、津軽の生家にいた太宰にとっては、終戦は「屈辱な敗北であったが、太宰の作家的現実はそれによって大きく変化するというようなことはなかった。」（相馬 三八）しかし、敗戦が太宰の作家としての生活にはそれ程影響を与えなかったとしても、日本を敗戦へと導いた指導者を批判する社会風潮の中、太宰の反貴族的な見解が一般的に受け入れられ易くなる状況に転じたと言える。そして、占領軍が定めた「二十年十二月に公布された農地調整法（第一次農地解放）」（東郷 八二）も、太宰の地主階級後退論の実現を促した社会的な変化の一つであったと言える。太宰にとって、戦後の状況は日本の裕福層を批判するための契機となっていたことは確かである。

この社会的背景を考慮すれば、直治の自殺は社会階級間に横たわる格差を補うための犠牲と解釈できる。従って、直治の描写の傾向において表現されているのは、「庶民への転生」というよりも、「貴族の尊き自滅」である。しかし、貴族が自滅した後、日本社会の将来は如何なる形態を取るものであろうか。太宰はかず子存在を通して、この問いに答えようとした。

表面的には、かず子の主なる問題は恋愛である。しかし、上原に夢中になるかず子の描写の背後には、思想的な背景が根強く伴っている。例えば、郡によると、「かず子が上原によってはじめて唇を奪われる場所がビルの階段の「中頃」であったということは、象徴的な意味をもつ。階段とは上階と下階とをつなぐ境界的な場所である。」（郡 一九四）この箇所は確かに太宰の階級意識を表現してはいるが、この表現において、「階級」的な構造が鮮明になっているとしても、「階級」は必ずしも「貴族」と「庶民」のことを指しているとは限らない。「貴族」と「庶民」は従来の日本社会において対向的關係を形成したが、「階級」という発想は、海外から移入された共産主義の思想体系に属する用語である。インテリのかず子が上原に求めたのは、凡俗に寄り沿う転生というよりも、改革派の持つプロレタリア意識であったと言えよう。

恋愛と革命が融合するこの物語の結末において、かず子は、改革の子（次世代の運動家、思想家）を生もうと決心する。多くの生き物は卵の段階を経て子孫を残すが、作品の結末に見られるこのかず子の母性的なイメージは、作品冒頭に登場している蛇の卵のイメージと重なっているのではないだろうか。

かず子の描写が彼女の思想上の方向性を具現化するものであったとすれば、次世代の革命家（蛇の卵）を根絶しようとする姿勢から、次世代の革命家を育む立場に転向する。実際には、戦前において太宰自身の共産主義活動家としての体験はこのエピソードと関連していると考えられる。戦前の日本の政治家にとっては、共産主義運動は「蝮」のような脅威を伴う運動であり、「蛇の卵」を燃やす行為は、日本政府の共産主義運動家に対する弾圧を表しているだろう。共産主義は「異人」の思想、外国から輸入された思想であったが、太宰にとっては、日本の左派に対する弾圧は、かず子が「蛇の卵」を燃やす行為と同様に、無害の異人に対する非人道的行動であっただろう。『斜陽』における蛇の話を、「庶民への転生説」に当てはめることは困難であるが、「共産主義への転向説」に照合すれば、細部まで解釈することができる。

先の考察では、「蛇の話」の解釈を通して、『斜陽』は単に「庶民への転生」を描いた作品ではないことを主張した。「庶民への転生」は確かに作中において見出せるが、それは直治の存在との関連においてのみ当てはまると言える。以下に、「沈んでいた橋」、「真赤なアヂサキ」、ニコライ堂付近の橋、そして「虹の橋・炎の橋」のイメージを取り上げ、かず子のアイデンティティーが具現化する「共産主義への転向」に関して説明していきたい。「虹の橋・炎の橋」は作中の最初に登場しているが、「沈んでいた橋」、「真赤なアヂサキ」、「ニコライ堂の橋」の方を先に取り上げることによって「虹の橋・炎の橋」が具体的に解釈できると考えられるために、これらの箇所の後で分析したい。

二. 「沈んでいた橋」と「真赤なアヂサキ」

『斜陽』には、「お老けになった」天皇を悲しむ母のシーンがある。太宰は、天皇の写真を取り上げることによって、如何なる意味を伝えようとしたのだろうか。

太宰自身の天皇制に関する見解は既に検討されている。「オレは実は皇室が懐かしくつてたまらない人々の中の一人なのだ。」（「傀儡」四〇九）という「傀儡」における引用を読むと、戦前における太宰の天皇制への見解は比較的肯定的であったことが分る。戦後に書かれた『パンドラの匣』における「天皇陛下万歳！この叫びだ。昨日までは古かつた。しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。」（三七八）という記述も、昭和二十一年一月の人間宣言以後のこの引用箇所においても、太宰の肯定的に考え方には、然程変化がなかったことを読み取れる。

しかし、太宰は天皇制を全面的に認める考えを持っていたとは判断できない。戦後の理想的な政治体制に関して、「私のいま夢想する境涯は、フランスのモラリストたちの感覚を基調し、その倫理の儀表を天皇に置き、我等の生活は自給自足のアナキズム風の桃源である。」（「苦悩の年鑑」八二）という記述を彼は残している。つまり、人間宣言をした天皇を「倫理の儀表」として太宰は賞賛したが、「倫理の儀表」以上の存在であると

は考えていなかったようであった。

坪井秀人は、『斜陽』とその下敷きである太田静子の『斜陽日記』を比較して、テキスト間において、とりわけ天皇に対する姿勢に関する差異を発見した。坪井によると、静子の母が天皇の写真を見たのは、昭和二〇年末（一九四五年）であるが、『斜陽』の「お母さま」が見た写真は昭和二一年一〇月の新聞に掲載されたものである。そのため、静子の母が見た天皇の写真と、かず子の母が見た写真について、「単に同じ写真でないというばかりでなく、生成される意味がまるで異なる」（坪井 二二）と坪井は指摘している。静子の日記の天皇の写真に対する言及は敗北の屈辱のみを伴うものであるが、「人間宣言」後の『斜陽』の写真への言及は屈辱のみを伴うのではなく、天皇の再出発を意味する側面をも持っていると言える。しかし、この屈辱と再出発が同時に伴っている写真によって、母子の天皇制に対する意見の差異が鮮明に判明する。

坪井は母と子の天皇の写真に対する異相を次の通り説明している。

[母]にとって、天皇の衰弱はその高貴さの損失において必然であったが、その娘にとって、自身が生きていく時代に刻まれた切断は喪失から開放へと読み替えられ、読み替えられることを通して、過去との紐帯は否定され、切断されなければならなかった。この否定と切断は天皇の存在そのものに向けられたものではなく、それをいわば新しい時代に向けてリセットするためのものであった。（坪井 二四）

天皇の写真の描写に見られる日本社会における「切断」は確かに作中に見いだせる。戦前の天皇制は敗戦ゆえに社会的に通用しなくなるが、その意識改革後の日本社会の将来には、如何なる制度が待っていたのだろうか。坪井の論文はこの点に関して具体的に触れてはいないが、「占領政策によって移植された平和主義・国際主義」（坪井 二五）という表現から、およそその彼の見解が把握できるだろう。坪井にとって、太宰が目指していた体制が激変した後の「戦後モード」は楽観的に眺められるものであると理

解できる。しかし、『斜陽』の中に散在している他のイメージを徹底的に分析すれば、太宰が戦後日本に対して有したビジョンはより鮮明に把握できると、筆者は考える。

夢の中で、かず子が「森の中の湖のほとり」で、青年と歩いている際、「湖の底に白いきやしゃな橋が沈んでゐた」（一〇五）ことが描写されている。郡の解釈によると、この沈んでいる橋は「庶民の世界へ」とつながるものとして登場していることになる。それゆえ、郡は、「夢のなかで失われていた橋は、しかし、現実の世界では再構築されねばならない」（一九八）と分析している。

「ああ、橋が沈んでゐる。けふは、どこへも行けない。」という発言からは、橋が不在のままではかず子がそれ以上は進まない状況が読み取れる。かず子にとって、進むべき道は「沈んでいる橋」の上にあったが、橋が沈んでいるために、その未来へと至る道をもはや前進することはできない。確かに現実において新しい橋を見つけ出さなければ、未来への道は開けないという設定であるが、他の渡るべき橋が既に存在しているのであれば、以前のものを「再構築」せずに、他の橋を渡ることが可能だろう。あくまで、「沈んでいた橋」はかず子の夢のなかに登場しているために、作中において描かれているかず子の経験を通して、「沈んでいた橋」の意味を検討しなければならない。かず子の描写の細部と照らし合わせると、「沈んでいた橋」は如何なる意味を持つだろうか。

「白いきやしゃな橋」という表現は、母の天皇の写真に対する発言を記憶させるイメージを狙っているのではないだろうか。威厳を保ったままで衰弱した、「お老けになった」天皇は、この「沈んでいる橋」と重なる面があると考えられる。天皇制は日本の進むべき道であったが、戦争という事件に会うことによって、その「未来への橋」は時代の波に覆われてしまった。残っているのは、活気に満ちた指導者である天皇ではなく、老衰し、憐みの対象となる老人の天皇である。

もちろん、かず子の恋愛の次元においても、この橋を解釈することができる。上原との関係を詩的に説明しようとするかず子は「炎の橋」という

表現を用いるが、この沈没している白いきゃしゃな橋は、その「炎の橋」の対立項になっている。作中における恋愛のプロット展開に照らし合わせれば、上原との関係が「炎の橋」であれば、「沈んでいる橋」はかず子の離婚した夫との関係を意味しているかもしれない。しかし、この恋愛における出来事が『斜陽』の表面的なプロットに過ぎないとすれば、その言動の裏には、それと関連する思想的次元があるはずである。政治的転向に関して、太宰が次に巧みに用いたイメージは「真赤なアヂサキ」である。

夢の湖のほとりに、「HOTEL SWITZERLAND」がある。このホテルの国際色豊かな空間に対して、「お母さまも、このホテルへいらつしやるのかしら？」という疑問がかず子に思い浮かぶ。しかし、お母さまは既に亡くなったことを知らされる。やはり、天皇制を好んでいたかず子の母の世代は、中立的立場から政治思想を考えることができなかっただろうが、華族たちは政治論争から撤退している状況であれば、政治に関する再考の余地は十分にある。ホテルは宿泊、つまり一時的な滞在を可能にする施設であるが、太宰は、この「HOTEL SWITZERLAND」の描写を通して、日本が中立的な立場から冷静に将来の政治体制に関して検討することの必要性を示唆している。

夢の中のかず子は、そのホテルの前庭に入ると、「アヂサキに似た赤い大きな花が燃えるやうに咲いてゐた」（一〇五）との描写がある。紫陽花^{あじさい}の特徴は育てられた土地の質によって、花の色が異なることである。普通の紫陽花は水色や紫色であるが、このホテルのアヂサキは、薄いピンクではなく、「真赤」である。当然ながら、「赤」は伝統的に共産主義を連想させる色である。恐らく「赤」く「燃える」この紫陽花を通して、太宰は日本の政治体制が共産主義に変わる可能性を暗示していると考えられる。

実際は、かず子は「真赤なアヂサキ」に関して次の通り考えたことがある。

子供の頃、お蒲団の模様に、真赤なアヂサキの花が散らされてあるのを見て、へんに悲しかつたが、やつぱり赤いアヂサキの花つて本当に

あるものなんだと思つた。（一〇五）

この発言の含意は、かず子は若い時分において、恐らく共産主義について考えたことがあるということである。しかし、彼女は共産主義下の日本社会を想像できなかったためにその考えを最終的に断念した。ニコライ堂付近にある「橋」の描写は正に共産主義への傾倒を断念するかず子の姿を伝えている。

三. ニコライ堂付近の〈決断の橋〉

『斜陽』において、かず子が彼女の政治的思想の方向性を決断する場面の一つは、ニコライ堂付近の橋の上の場面（一〇九——一一）である。この箇所において、かず子は「赤いベレー帽」を被った女性と話している。その友達に借りたレーニンの本を読んだかと聞かれた際、かず子は、「表紙の色が、いやだつた」ために読まなかったと返事する。レーニンではなく、「更級日記」を読んでいたと説明すると、赤いベレー帽の友達に「更級日記の少女」と呼ばれて、「永遠の別れ」と思われる別れをする。

この会話が「お茶の水駅」近くの「ニコライ堂の見える橋の上」で行なわれたことは重要な設定であることに疑いの余地はない。御茶ノ水駅付近には明治大学文学部があって、日本のインテリとゆかりのある場所である。その上、「お茶ノ水」の地名には名門女子大を連想させる要素がある。このような舞台の選択によって、太宰はかず子のアイデンティティを貴族の若い世代の代表として際立たせている。しかし、「ニコライ堂の見える橋の上」は何を暗示しているだろうか。ロシア正教の会堂であるニコライ堂はロシアと関係のあるビルであるが、冷戦下のソビエト連邦の共産主義時代であって、革命前後のロシアに生じた変化を想起させる事物であると考えられる。お茶の水駅付近の橋からニコライ堂が見えることは、かず子の立場が共産主義に移行する可能性が小さくないことを意味している。友達の赤いベレー帽も、身近に革命家がいることを示唆している。

レーニンの本などの登場をも視野に入れて解釈すれば、その橋は明らか

にかず子にとって政治的決断がなされる橋である。その際、かず子は共産主義を否定するばかりであるが、後のかず子は「あれから十二年たつたけれども、私はやつぱり更級日記から一步も進んでゐなかつた」と言う。この発言は彼女の政治的思想が発展しなかったとしか解釈できない。赤いベレー帽の友達と話しているかず子は、共産主義に転向する意欲がなかったために、決断を暗示する「橋」の上に立ったにもかかわらず、渡らないままに引き返す。

「橋」が政治的決断の場として登場している文学作品は、『斜陽』が初めてではない。共産主義運動への参加者たちに対する弾圧を描いていた芹沢光治良の「橋の手前」（昭和八年）はこの好例である。短編小説の「橋の手前」において、主人公の杉野は共産党に共感していたが、共産主義が弾圧されている時代において、彼は運動家と関わるか否かに関して悩んでいる。「橋の手前」には、人間が渡ることが可能な物理的な意味での橋は一切登場しないが、タイトルが含意するものは以下の引用を通して理解できる。

学理上マルクシズムがx x x x、それは疑問はないとしても、それだからとて直に橋を渡つて実践行けるかは、銘々の過去や性格や役割で異ふであらうに、空見の説明には、さう出来ない二人に向けた非難がかくされてゐるやうに、少なくとも二人の胸には響いた。（芹沢 三七四）

最後に再び、杉野の夫人は、運動家の空見と関わらない方がよいと判断し、「危ない橋を渡りさうになる貴方を掴まへてゐなくてはならないなんて」（芹沢 三八二）と言い出す。この物語においては、共産主義運動への参加を「危ない橋を渡る」と同等の行為として描写されている。『斜陽』において「共産主義への転生」が危険な行動に該当するか否かに関しては、作中において説明されていないが、GHQの検閲が行なわれた目的の一つは日本が共産化することを避けることであった点を考えると、太宰が執筆

を行なった戦後においても、芹沢の時代と同様に、共産主義運動に係わるのは「危ない橋を渡る」のと同様な行為と解釈できるだろう。

この箇所における橋の描写は重要な技巧であることが、太宰の表現の選択のあり方から明らかになる。最初に太宰は「ニコライ堂の見える橋の上だった」と描写しているため、読者は既に会話が橋の上で行なわれていることが分るはずである。しかし、それにもかかわらず、その後の描写においても「そのお友達は、やはり橋の上に立つたまま、動かないで、じつと私を見つめていた」と描写している。太宰はこの箇所で、橋の上での会話の特殊な意義を主張するのみならず、橋の存在を前景化することによって、作品の他の橋が登場する箇所との関連性を示唆している。

かず子はこの時点において共産主義への転向と暗示する「橋」を渡らないが、「炎の橋」を渡ると決心する際、それは恋愛を目指す橋であると同時に、革命へと至る橋でもある。『斜陽』には複数箇所において橋が登場しているが、これは偶然生じたのではなく、太宰が意図的に選択した結果であるだろう。作中で繰り返される橋の描写は、ロゼッタ石と同様に、異なる次元を読み合わせるための重要な手法として機能している。『斜陽』に併存している主要テーマは恋と革命であるが、橋が登場している場面を分析すれば、二重構造の両面が同一場面に描き込まれていることが分る。

五. 「虹の橋」と放蕩の関係

『斜陽』において「虹」が初めて登場する際（八一―八二）、橋と一切関連しない形で描写されている。最初に上原に会った場面において、かず子が体験した感情は「胸に淡い虹がかかつて」いるような心情であった。この場面において、かず子の感情は「虹」のみを通して表現されている。虹という自然現象は、鮮やかで一時的な現象である。深い感情でも、時間が経つと消えるものであるために、《感情は虹である》というメタファーは、惚れ込みを表現するのに適した隠喩であると言える。

しかし、時間が経過すると、「その虹はあざやかに色彩の濃を増して来て」、やがて「夕立の晴れた空にかかる」儚い虹と異なってくる。消えな

い「胸にかかっている虹」になる。この詩的イメージを通して、上原に魅了されてきたかず子の次第に強まる想いを表現している。そして異質な恋愛であるからこそ、より強烈なメタファーが必要になる。かず子の心の中の虹が消えないことは、その虹は消えるはずの「感情」よりも真実に近いものであることを意味している。

この描写において、かず子が体験した「虹」は未だに「橋」として表現されていないが、虹が登場している次の箇所において儚い「感情」を表現する虹が次の引用の通り、「炎の橋」に変化する。

さいしょに差し上げた手紙に、私の胸にかかっている虹の事を書きましたが、その虹は螢の光みたいな、またはお星さまの光みたいな、そんなお上品な美しいものではないのです。そんな淡い遠い思いだつたら、私はこんなに苦しまず、次第にあなたを忘れて行く事が出来たでせう。私の胸の虹は、炎の橋です。胸が焼きこげるほどの思ひなのです。（九四）

この箇所ゆえに、かず子の恋愛に対する姿勢には、複数の変化が見られたと判断できる。第一に、「虹」が「橋」に変形することを通して、かず子の想いは単なる「一時的な現象」から「実用的な手段」である橋に変化したことが主張されている。虹は「橋」として描写されているからこそ、到達可能な土地に繋がっているはずである。「橋」の存在によって、「渡るか否か」という問題が想起される。やはり、かず子の上原に対する想いの裏には、思想上の方向性の選択という問題が隠されている。共産主義に対して好奇心を持つに至ったかず子の人生においては、もう一度「決断の橋」が現れたと言える。

自然現象である虹は、何かと何かを繋ぐ役割を果たさない。しかし、形の類似性ゆえに、世界中に虹を空の橋と表現する文化が多くある。川田によると、アジア、北欧諸国など、様々な文化において、橋は「天国への通い路」（川田 二）として理解されてきた。この点に関して、川田は「も

し神さまが住みたもう天国というものがあるとするならば、それは大空に架かる七色のアーチ、虹よりもふさわしい通い道は考えられません」（川田 二）と断定している。断絶していると見える地上と天空を繋ぐ容姿のために、『虹は橋である』という隠喩が成り立つ。

太宰は、虹を通して、何と何を繋ごうとしていたのだろうか。虹の描写が利用されているからこそ、虹を通して表現されている思想は、通常の日常レベルの思想を超えて、「真実」に近づくものだと、太宰は読者に訴えていると考えられる。

そして第二に言えるのは、「橋」は「蛭」や「星」のように「上品で美しい」ものではない。「火」のように危険を伴う炎の橋はパッションに溢れた決断を可能にする手段である。かずこは以前にニコライ堂付近の橋を渡らなかったが、今回は、彼女の「胸」を「焼きこげ」ても渡る必要性を感じている。太宰は、戦後の日本人に対して再び、共産主義という「危ない橋」を渡るよう勧めているのではないだろうか。虹の橋は同時に「炎の橋」でもあるために、渡る人々は害を被る覚悟で渡らなければならない。日本が共産主義国になるのであれば、芹沢が「橋の手前」において描いた、日本の知的エリートの優柔不断さは許せない。とりわけ華族階級は滅亡する覚悟が必要であると思われる。このような危険性に満ちているが、それでも渡らなければならない橋が正に太宰が想像した「炎の橋」である。

物語の途中まで、上原の住居は「京橋の×町×丁目のカヤノアパート」であるが、「罹災」のために彼は引っ越さなければならなくなる。具体的な説明がないために、読者は「罹災」のことを「火事」など、物理的な事件として解釈してしまう。しかし、上原に対するかず子の思いが「炎の橋」として表現されていることを考慮すれば、この罹災は物理的な火事などというよりも、不倫関係ゆえに起こった恋愛上のトラブルなどが、婉曲的に表現されたものだろう。かず子の思いが「炎の橋」であれば、上原の人生全ては、彼の不道德性のために今後燃え尽きてしまうだろうという気配が作中に感じられる。この意味で、直治、かず子、上原らの主要登場人物三人の人生には、共通のテーマがあると言える。それはデカダンスである。

中村によると、「頹廢 (décadence) とは、繁栄を極めたものが爛熱の挙句に衰退する現象である。」(中村 九四) 太宰の作品全体において放蕩が重要なテーマになっていることは周知の事実である。華族の旧モラルを無視するかず子は個人レベルにおいて道徳上の「革命」を起こしているが、このような設定は太宰の新しい着眼ではなく、従来通りの不動のスタンスであると言える。しかし「放蕩主義革命」の裏には、やはり政治的な意味での革命が潜んでいる。

かず子は、家族が持たないままに出産しようとすることによって、貴族としてのアイデンティティを断ち切ってしまう。日本社会において、華族がこのような不道徳な行動によって消滅すれば、プロレタリア時代が到来するだろうと太宰は推測している。さらには、華族を燃やしつくす不道徳性の炎は日本社会をより尊いものに純化する炎でもあると太宰は『斜陽』において主張している。この意味で、太宰が描写している炎の橋は、日本を純化するに至る経路としても、新しい政治的領域に国民を導く手段としても、解釈できる。

まとめ

『斜陽』というタイトルの隠喩性を分析すれば、おそらく戦前の日本の夕日を指していると考えられる。しかし、夜が更けるとまた朝は来る。『斜陽』において予測されている再生の朝は、新しい庶民の時代と同時に、プロレタリアの時代の到来を意味する再生でもある。当然、太宰を純粹にプロレタリア作家として捉えることは困難である。鳥居は、「太宰の場合、彼がマルクス主義者であったと判定するには、あまりに疑問が多すぎるのである。(中略) マルクス主義に揺さぶられながらその周辺を彷徨していたと見た方がよさそうである」(鳥居 九五) と述べている。確かに『斜陽』に見られる太宰の共産主義への傾倒は具体性に欠けているために、実現できるような理念ではない。

放蕩主義と共産主義と、太宰にとってはどちらの方がより重要であったろうか。『斜陽』における両者の描写を比較すれば、放蕩主義の方が鮮

明に描きこまれていることが分る。しかし、『斜陽』において、太宰が彼の青春時代に遭遇した思想に回帰しているのも確かである。放蕩という橋を渡ることによって、実際に共産主義という理想郷に到達できるのだろうか。太宰が『斜陽』を通して提起した「共産主義への転向」の構想に矛盾点があっても、彼の作品への評価は揺るがないだろう。なぜなら、太宰が二一世紀において愛読されている理由の一つは、彼が矛盾を魅力的に描き出す作家であるからだ。

参考文献

太田静子『斜陽日記』石狩書房、昭和二三年

桶谷秀昭「太宰治／反文化的パトス」（三好行雄編）『太宰治必携』学燈社、昭和五六年

川田忠樹「虹の橋——天国への通路」（吉田巖編）『橋のはなし II』技報堂出版、昭和六〇年

郡継夫『太宰治／戦中と戦後』笠間書院、平成一七年

太宰治「苦悩の年鑑」『太宰治全集 第八巻』（筑摩書房、平成二年）七〇—八二

太宰治『斜陽』（初出昭和二二年）『太宰治全集 第九巻』（筑摩書房、平成二年）三一—六六

太宰治「僂僂」『太宰治全集 第一二巻』（筑摩書房、平成三年）四〇七—四〇九

太宰治「東京八景」『太宰治全集 第三巻』（筑摩書房、平成一年）二七〇—二九九

太宰治『パンドラの匣』『太宰治全集 第七巻』（筑摩書房、平成二年）二七七—四一八

坪井秀人「切断と連続／『斜陽』と天皇」『太宰治研究 16』和泉書院、平成二〇年（一六一三五）

東郷克己「太宰治とチェーホフ／「斜陽」の成立を中心に」（『国文学解釈と鑑賞』第三七巻一二号）八一—八六

鳥居那朗「太宰とその時代」『解釈と鑑賞別冊 現代文学講座 昭和の文学
II』（昭和五〇年六月）八九一一一〇

芹沢光治良「橋の手前」（初出昭和八年）『日本現代文学全集 第六二巻』
講談社、昭和四一年（三七三一三八三）

相馬正一『太宰治の生涯と文学』洋々社、平成二年

中村三春「『斜陽』のデカダンスと“革命”／属領化するレトリック」（『国
文学 解釈と教材の研究』第四四巻七号）九四一一〇〇